



自然科学書協会会報

NSPA JAPAN

THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN

発行人 | 金原 優
編集 | 広報委員会

■ 自然科学書協会に期待すること 自然科学書の多言語国際化を

東京大学名誉教授 樋口広芳

■ 講演会「文学としての科学書」 (講師: 柳田邦男) を聴いて

ノンフィクションライター 松浦晋也

■ 自然科学書フェア2017 / サイエンスカフェの報告

■ 専門委員会第65・66期事業総括 ほか

2017.7.20 NO.3 (通算 85号)

一般社団法人 自然科学書協会 | 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 | 神保町 101 ビル 1 階 | TEL 03-5577-6301 | <http://www.nspa.or.jp/>

● 自然科学書協会に期待すること ●

自然科学書の多言語国際化を

東京大学名誉教授 樋口広芳



略歴は 2 頁に掲載

私はここ二〇年以上にわたって、鳥の渡りを研究している。衛星に搭載されたアルゴシステムを使って、鳥の位置や移動の状況を追跡しているのだ。この方法によれば、鳥たちが地球のどこにいても、位置（緯度と経度）とその変化の様子をほとんどリアルタイムで知ることができる。

その結果、明らかになったのは、鳥たちは私たちの想像をはるかに超えてすごい旅をしているということだ。その代表例は、タカ類の一種、ハチクマの渡り。この鳥は、秋と春の渡りを通じて、東アジアのすべての国を一つずつめぐっている。東南アジア諸国や北朝鮮、韓国までふくめてだ。一年間の総延長移動距離は二万数千キロ。しかも、秋と春で渡り経路は大きく異なるのに、戻る先は、多くの場合、人間世界の言葉を使っていえば

何丁目何番地何号までびしりと決まっている（くわしくは、拙著『鳥つてすごい！』山と溪谷社、二〇一六年刊を参照）。再捕獲ができるなら、ハチクマを介して越冬地のインドネシアの人と手紙のやりとりができるのではないかと思うほどだ。そんな関係で、私は海外、それも鳥たちが渡って行く先々の国の方と交流が深い。共通のテーマについて共著で論文を書いたり、渡り経路上の土地とともに訪ねたりする。また、かかわりのある国の研究者を客員教員として招聘したり、あるいは私が招聘されたりする。交流するのは、研究者だけではない。鳥を観察している一般の多くの方もふくまれる。

コミュニケーションは英語で行なうというか、そうせざるを得ない。しかしそれでは、研究者どうしはよいとして、現地の多くの関係者とはつながれない。鳥を観察している人の多くは英語を理解しないからだ。その難点を克服する一つの手段として、私は、研究の成果をまとめた書籍あるいは解説文を現地の言葉で翻訳出版することに気遣っている。鳥の渡りを衛星追跡した成果をまとめた拙著『鳥たちの旅』（NHK出版、二〇〇五年刊）は、これまでに中国語、韓国語、英語、インドネシア語に翻訳され、出版されている。ロシア語版も準備されている。これにより、より多くの人たちが、いくつもの国境を越えて渡る鳥たちの様子を共有することができている。大変うれし

いことだ。

だが、こうした出版活動は、現状では非常に限られたものとならざるをえない。販路ないしは読者数が限られているため、採算が合わないからだろう。しかし、ほんとうにそうだろうか。渡り鳥の例に限らずとも、それぞれの国の自然や生きものをめぐることがらは、いろいろな国や地域の人の関心を引き起こすはず。もっと広くそれぞれの国の言語に翻訳され、出版されてよいのではないか。流通経路さえ開拓すれば、採算だつてとれるのではないか。

もちろん、英語の本はたくさん翻訳され、出版されている。日本語の本も、英語にはそれなりに翻訳され、出版されている。が、自然科学の関連分野では、英語以外の現地の言葉で書かれた興味深い本が、実は多数あるのではないか。もちろん、日本にだつてある。そうした本を互いに発掘し、それぞれの国で翻訳、出版するということが、もっと広く行なわれてよいのではないか。紙媒体がむずかしいければ、電子媒体だつてよい。要は、



『鳥たちの旅』（NHK 出版）は中国語、韓国語、インドネシア語などに翻訳出版されている。

どこにどれだけ興味深い本があるかを発掘する、探し当てる努力をするかだろう。私は仕事から、渡り鳥のあとをついていった先々で、いろいろな国のいろいろな本に出会っている。現地語は読めないけれど、図や写真などをながめながら、おもしろそうなものとうれしい出会いを果たすことが少なくない。自然科学に限ったことではないが、世界の出版社はもともと互いの交流を深め、自国の興味深い書籍の広報につとめ、多言語での出版を促進すべきなのではないか。

興味深い書籍は、欧米圏だけでなく、中国や韓国、東南アジアやアフリカにも、また南アメリカなどにもたくさんあるはずだ。自然や生きものの世界、とりわけ長距離を移動する鳥やチョウ、魚やウミガメ、イルカ、クジラなどは、ことのほか、近くの国や地域だけでなく、遠く離れた国や地域とのつながりが深い。自分の国で見られるそうした生きものは、ほかの国や地域でどのようならしをしていいるのだろうか。人のくらしとはどうかかわっているのだろうか。減少などの心配はないのだろうか。これらのことがらについて知ることは、科学の先端を知ることではない。しかし、地元の人が現地の言葉で書いたものは、きつと予想以上に興味深いに違いない。

出版界の国際交流は、どのくらいさかんに行なわれているのだろうか。もちろん、国際見本市などがあって、各国の多

数の書籍が紹介されているようなことは承知している。しかし、そこで得られる情報はどうしても限られたものになるだろう。違った国の編集者が互いにさまざまな情報を交換する、あるいはさらに進んで、知恵を出し合って新しい企画について相談する、というようなことは行なわれているのだろうか。言葉の壁はあるにせよ、この時代、いろいろ工夫の仕様はあるはずだ。

紙媒体の発行部数は限られたものになるかもしれない。しかし、電子媒体であれば、その特徴を生かしつつ、場合によつては自然や生きものの動画をふくめて魅力ある内容を広く伝えることができるのではないか。ベストセラーはねえないまでも、多様な自然と生きものの世界の魅力を多様な言語で伝える活動は、出版界の新しい潮流をつくり出すことになるのではないだろうか。

翻訳は、今後、英語などの主要言語だけでなく、いろいろな言語を対象に促進されていくはずだ。多様な言語への翻訳は、現在よりもずっと楽になっていくに違いない。そこではもちろん、インターネットの利用も重要だろう。

日本の自然や生きものの世界をめぐることがらが、中国や韓国、東南アジアやロシア、アフリカや南アメリカで読まれるようになる。中国や韓国、東南アジアやロシア、アフリカや南アメリカの自然や生きものの世界をめぐることがらが、

日本語で読めるようになる。自分の国で過ごす生きものが、渡って行った先々でどんなくらしをしているのか、人のくらしとどうかかわっているのかなどを、現地の人の語るところで知ることができる。なんとすばらしいことだろうか。こうした活動は、出版界をおおいに盛り上げることもなるに違いない。

こうした中で編集者に求められるのは、まさに企画力だろう。編集者間あるいは関係者間の広く深い交流を通じて、魅力ある本づくりに取り組む努力。国際見本市などで紹介されるべきあがった書籍を翻訳するのではなく、自分たち自らが発掘、提案、製作していく過程が重要だ。編集者の腕の見せ所が問われることになる。

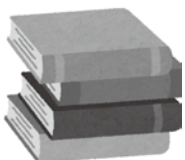
そんな大変なことできるわけがない、と思われるかもしれない。しかし、たとえば自然科学の研究者、とりわけ、野外で自然や生きものを対象にする野外生物学者は、観察や実験を繰り返し、たくさん失敗の中からわずかの成功を見出す成果を論文にしても、一部あるいは大幅な書き直しはふつう。あつけないリジェクトされることだってある。あるいは、努力して推敲したはずなのに英語の出来が悪い、などと指摘される。まるで、人格まで否定されているような思いを味わうことになる。それでもくじけずに（！）、別の学術誌に再トライする。もちろん、編集者にだってたくさん苦勞

はあるだろう。しかしおそらく、こうした研究者のような身の縮む苦勞はしていないのではないか、というのはあまりにも認識不足だろうか？

ともかく、現在のままの状態を続けていけば、自然科学書の出版はますますむずかしくなることは確かだ。これまで、この欄でも再三にわたって指摘されている。国内外の関係者間の交流を深め、知恵を出し合つてよい企画を構築する、写真やイラストもより広い範囲から求める、ふりまわされないことを前提にインターネットもおおいに活用する、などとして、これまで味わったことのない未知の世界へといざなつていただけることを願つてやまない。

○著者略歴

一九四八年 横浜生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程修了。米国ミシガン大学動物学博物館客員研究員、日本野鳥の会・研究センター所長、東京大学大学院農学生命科学研究科教授を経て、現在、東京大学名誉教授、農学博士。専門は鳥類学や生態学。主著に『生命にぎわう青い星―生物の多様性と私たちのくらし―』（化学同人）、『日本の鳥の世界』（平凡社）などがある。



第六六期第二回定時総会および 第六六期第四回会員集会報告

去る五月一八日、一六時より出版クラブ会館において、自然科学書協会第六六期第二回定時総会（予算総会）を開催いたしましたので報告いたします。

定刻の一六時、司会者が総会の開会を宣したのち、金原理事長による開会挨拶が行われました。続いて司会者は定款第二八条に基づき総会議長として金原理事長を指名し総会に移りました。

議長は定款第三二条の定めに基づき本総会の議事録署名人として、池田理事、梅澤理事を指名したのち、議案審議に移りました。

総会議案は、

第一号議案 第六七期事業計画書案承認の件（説明・南條副理事長）

第二号議案 第六七期収支予算書案承認の件（説明・飯塚理事）

第三号議案 会費値上げの件（説明・飯塚理事）

で、議長はそれぞれの議案について説明をもとめ、担当副理事長および担当委員長による説明の後、議決に移り、何れの議案も満場一致をもって可決承認されました。

この後、議長により閉会が宣せられ第六六期第二回総会は滞りなく終了しました。総会の後、筑紫副理事長より閉会の挨拶が行われました。

定時総会の後、一六時三〇分より、第六六期第四回の会員集会を開催しました。

会員集会は、日頃の自然科学書協会の活動、特に専門委員会活動をお知らせするのが目的で、今期はすでに三回開催しております。第四回にあたる今回は年間の活動実績のご報告が主たる内容になりました。特に今回の報告は一年間の活動を総括したものになるため、紙面の都合上その詳細については、各専門委員会の委員長による委員会報告に委ねることいたします。

（総務委員長 飯塚尚彦）

■第六六・六七期委員会開催一覧 （二〇一七年四月～六月）

●理事会

・四月二〇日（木）／一五時～一六時四十分 日本出版クラブ会館

・五月一八日（木）／一四時～一五時 日本出版クラブ会館

・六月二五日（木）／一五時～一六時一五分 日本出版クラブ会館

●監事会

・六月二六日（月）／一二時～一三時 文化産業信用組合

●専門委員会

・四月五日（水）著作・出版権委員会

・一〇時～一二時 日本出版クラブ会館

・四月一四日（金）販売・出版委員会
自然科学書フェア小委員会／一二時三〇分～一五時 コロナ社

・四月二七日（木）広報委員会／一六時

～一七時三〇分 文化産業信用組合

●その他

◆五月二一日（木）全出版人大会がホテルニューオータニで開催されました。

■事務局だより

〈当会代表者の変更〉

●医歯薬出版株式会社

旧代表者…大畑秀穂 新代表者…白石泰夫

●株式会社へるす出版

旧代表者…長谷川潤 新代表者…佐藤 枢

●株式会社緑書房

旧代表者…森田 猛 新代表者…森田浩平

〈代表者／当会代表者の変更〉

●株式会社建帛社

旧代表者…筑紫恒男 新代表者…筑紫和男

〈住所変更〉

●株式会社日本臨牀社

旧住所…大阪市中央区道修町二一三—八
新住所…東京都港区虎ノ門三—八—二一
虎ノ門33森ビル7階

電話…〇三—六八四—四五五八
FAX…〇三—六八四—四五五八

◆計 報

当協会 元理事・現相談役（平成一七年～平成二九年）山口雅己様（元一般財団法人東京大学出版会）が去る六月四日に逝去されました。山口様は長きにわたり協会の発展に寄与されました。ここにご功績を偲び、深く感謝を申し上げます。すとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

先日、あるイベントで大学生たちを見かけた。みな若者らしく明朗快活な様子を微笑ましく思う一方で、頻繁にスマホの画面を見つめる姿に一抹の寂しさも感じた。

二〇年ほど前、私が大学生だった頃を思い出すと、隔世の感がある。当時は、スマホが世に出ていなかったのはもちろん、携帯電話自体それほど普及しておらず、私も持っていなかった。友人と待ち合わせをする時には、場所と時間を正確に決める必要があった。

あの頃、知識や情報を得る手段の中心は、何と言っても紙媒体だった。私が大学二年生だった一九九六年、出版物の売上は、まさにピークだったのである。

時代は変わり、インターネットを開けば、デジタル化された情報が猛スピードで更新されていくことが当たり前になった。しかし、インターネットに溢れる情報の精度はさまざま、中には不確かなものもある。このような時代だからこそ、専門性の高い書籍を発行する自然科学系の出版社が果たしていくべき役割は大きいはずだと、あらためて感じる。

（K・M）



講演会「文学としての科学書」
(講師：柳田邦男)を聴いて

ノンフィクションライター 松浦晋也



○著者略歴

1962年生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了。航空宇宙・通信・放送等の取材に従事した後、独立。日経BP社記者として、航

※本年五月二三日(土)に日本出版クラブ会館・鳳凰の間において開催した自然科学書協会七〇周年記念講演会「文学としての科学書」(講師：柳田邦男)について、ノンフィクションライターの松浦晋也氏に講演内容の紹介記事をご執筆いただきました(編集部)。

柳田邦男氏の講演は小学生の時の思い出から始まった。

小学校一年の時、病気で三か月学校を休んだ。その時に手近にあった子供の本を読み尽くした。この体験で人生の方向性が定まった気がするという。小三で敗戦を経験。一番上の兄が復員し、生活のため古本屋を始めた。柳田氏は店番をするようになり、本が読み放題であらゆる本を読んだ。その中で天文学に興味を持つ。中学に入ると気象学に興味に移った。昭和二十七年に米国による日本占領が終わる。報道規制がなくなり、原爆報道が始まった。「アサヒグラフ」誌の特集号にショックを受けた。中央公論社が出していた科学雑誌「自然」に、ピキニの水爆実験の論文が掲載されていた。これらを読んだことが、後年、科学・技術を取材するきっかけとなった。

裕福な家庭ではなかったため、大学は実習実験のある理工系に進まず、経済学部に進学した。当時は資本主義が社会主義かの、二項対立的な政治状況だった。自分も社会主義国家になるしかないかと思っていたが、大学に入学して一年ほどで、イデオロギー国家では駄目だと気がついた。イデオロギーで国をつくるのは危ない。現実から始めないと——そこで柳田氏は、ジャーナリズムの世界を志してNHKに入社した。

最初の任地は広島だった。これは願ってもない幸運で、核戦争の現実を間近で見ることとなった。広島の際は東京に帰って災害担当になった。かつての気象少年が、台風の取材をするようになったわけである。このような経験の中から生まれたのが『空白の天気図』(新潮社、一九七五)だ。昭和二〇年の枕崎台風の記録である。枕崎台風が原爆と台風の複合災害であると、気象予報官だった根本順吉氏が教えてくれたことが執筆のきっかけとなった。

この本の執筆当時、広島地方気象台の昭和二〇年頃の記録は、外部の者でも借りることができた。出版後に気象台は当時の記録が歴史的に貴重なものであることに気がつき、厳重保管とした。氏は、「一冊の本を書くことの影響にびっくりした」という。

一九六六年二月四日、札幌から羽田に着いた全日空のボーイング727旅客機が東京湾に墜落した。一か月後の三月四日には、カナダ太平洋航空のダグラスDC-8旅客機が着陸に失敗し、羽田岸壁

に衝突して炎上した。翌五日には、英国海外航空(BOAC)のボーイング707旅客機が富士山で空中分解した。柳田氏は社会部で一番若く、取材の最前線に投入された。氏は、これらの事故の取材をまとめて五年後に『マツハの恐怖』(フジ出版社、一九七二)を上梓した。

当時、調査団の手足となるスタッフとして、防衛庁第三研究所が調査に参加した。まだコンプライアンスが緩く、NHK社員の柳田氏は防衛庁三研に入り浸りで専門知識を吸収することができた。東京大学の山名正夫教授が防衛庁三研で、三〇分の一の模型で機体が水面に接触する時に何が起きるかを調べる実験を行った際も立ち会った。山名教授という専門家から教わりながら、ジェット機の墜落原因追及を取材したので理解が深まった。一番の専門家のところに入り浸ることが一番の勉強になることを痛感した。



自然科学書協会講演会2017(創立70周年記念)
「文学としての科学書」講師：柳田邦男氏

一九六〇年代後半、NHKはコンピュータを導入し、その利用法を探り始めた。報道現場でも、報道の仕事がコンピュータに載るかどうかという大議論があったという。NHKに入ったB500というコンピュータは画像を扱えた。アポロ11号の月着陸で柳田氏は、宇宙飛行士の音声は衛星通信経由で入ってくるので、それに付ける映像をB500で生成することにした。

まず米航空宇宙局(NASA)からアポロ11号のフライトプランを取り寄せた。多数のCONOCO——ある条件を満たせば次のステップに進み、そうでなければ引き返す——という意志決定の関門があり、着陸五三秒前に最後のCONOGOチェックがある。ボタンでCONOGOを選べば、それに応じたアニメーション画像が生成するプログラムを作ってもらった。今流に言えば、インタラクティブなコンピュータ・グラフィックということになる。これがうまうまいった。実際のアポロ11号の着陸では、直前にアームストロング船長がクレーターを回避してホバリングしたが、それをCGで再現できた。

「エンジン・カット」で、自分がボタンを押すと映像の月着陸船もすつと降りた。ライバルの米テレビ局は模型と手書きアニメーションだった。

ただし、柳田氏とコンピュータとの関わりはそこまでだった。その前年の一九六八年の参議院選挙で、当確を早く出すのにコンピュータを利用した。数学科を出た知人に統計的に当確を判定する方程式をプログラミングしてもらってシステムを組んだ。

このシステムを利用して、北陸の一人区において開票率一〇%で当確を打ち出したら、負けた候補がショックで行方不明になるといふ事件が起きた。人の一生をデータで左右することに恐怖を覚えた。



「ということ
で、以後コン
ピューターと
距離を置くこ
とにしました
——まあ、偏
見でありま
す」と柳田氏
は語る。

一九七四年にNHKを退社。流れ作業
で人の書いた原稿をチェックするのは自
分の仕事ではないと思ったのだそうだ。

一九七〇年代はガン死者の増加した時
期で、結核を克服したこの国でガンとど
のように闘っているかをフォローしようと
考えた。「週刊現代」が連載誌面を提
供し、『ガン回廊の朝』（講談社、一九
七九）が完成した。

同書では、論文の背景にある医学者の
問題意識から成功や失敗にまで至る、研
究のプロセスを描いた。新しい治療法に
は発想の原点がある。これはドラマだと
感じ、論文の背景を人間ドラマとして描
こうと考えた。病巣の鮮明なX線映像を
求めて、二重造影法を開発した千葉大学
の白壁彦夫先生の話を、入り浸るように
して取材し、新しい手法の開発プロセス
を書いた。開発初期の苦勞で人間くさい
エピソードがどんどん出てくる。書くた
めには内容を理解しなくてはいけない。
取材は科学的思考を訓練される場でもあ
った。

ガンの取材をしていると必然的に死に
ぶつかる。『ガン 50人の勇気』（文藝
春秋、一九八二）では、ガンで死んだ人

の生き様を執筆した。出版前に雑誌「文
藝春秋」に一部を掲載したところ、様々
な方が手紙をくれた。その中から膀胱ガ
ンを患った精神科医の西川喜作先生との
つきあいが始まり、先生の死まで伴走し
て『「死の医学」への序章』（新潮社、
一九八六）を執筆した。

そして、息子の自死という衝撃的な体
験があった。人間の命とは何かと考えた。
息子は自殺を図り脳死状態になり一日
間を生きた。はたして脳死は人の死なの
か。脳死の息子を見ていると生き生きと
している。脳死となつてしまった息子と
の「会話」、人生を尋ね直すような問答、
答えのない質問——この体験を『犠牲
（サクリファイス）』（文藝春秋、一九
九五）にまとめた。

科学史の村上陽一郎氏の著書『生と死
への眼差し』（青土社、一九九三）に大
きなヒントがあった。哲学者のウラジミ
ール・ジャンケレヴィッチが主張する
「死の人称性」という議論である。死の
意義づけ、つまり誰にとつての死なのか
という問題だ。

脳死は、人格も失われ人が物体となる
という現象である。しかし、脳死の息子
を死んでいると思えない自分の意識は、
人称性という概念で理解できる。「一人
称の死・生き方が問われる」、「二人称
の死・ケア、介護、死を乗り越える」、
「三人称の死・冷静、客観性」——とい
うように。そこから、柳田氏は「2・5
人称の視点から死を見る…三人称から踏
み込むこと」という考えに行き着いた。
2・5人称というのは柳田氏がつくった

言葉だ。べつたりではない、しかし完全
な客観でもない。潤いとし柔軟性のある視
点という意味である。

今、氏は『2・5人称の視点』という
タイトルの本を書いていて、「とても大
事な思想だと自分は勝手に思っていま
す」という。たとえば、視覚障害者は目
が見えなくても、美術館の雰囲気の中で
名画の前に立つて学芸員からの説明を受
ければ、絵画をイメージすることができ
るし、楽しむこともできる。このような
当事者の立場にたつてどのようなサービ
スができるのか、2・5人称の視点だ
という。

さらに柳田氏は、事故というものをど
うとらえるかに言及した。「誰かがミス
をした」というのが旧来の事故のとらえ
方だ。一方、現在は、「なぜミスをした
か」を考えるようになっていく。「組織
事故」という考え方だ。

原発事故についてもこの視点が重要だ。
リスク要因が連鎖し、最後に運転員が事



故の直接原因を起こす。事故原因を現場
の責任に帰すのは誤りであつて、事故に
至るリスクの連鎖を分析しないといけな
い。柳田氏は、二〇〇五年四月に起きた
福知山線脱線転覆事故で、事故の再調査
を担当した。同事故は運転手のブレーキ
操作の遅れが直接原因だが、操作がなぜ
遅れたかを考えると、JR西日本が抱え
る組織の問題がどんどん出てきた。

このような分析が、福島第一原子力発
電所の事故ではいまだになされていな
い、と柳田氏は指摘する。

最後に柳田氏は、最近面白いと感じた
本を紹介した。

『植物はそこまで知っている』（ダニ
エル・チャモヴィッツ著、矢野真千子
訳、河出書房新社、二〇一三）

『植物は「知性」をもっている』（ス
テファノ・マンクローゾ・アレックスサンド
ラ・ヴィオラ著、久保耕司訳、NHK
出版、二〇一五）

『鳥の巣の本』（鈴木まもる著、岩崎書
店、一九九九）

『フンボルトの冒険』（アンドレア・ウ
ルフ著、鍛原多恵子訳、NHK出版、
二〇一七）

「私の知人のフランス人の植物学者は
いつも『牧野日本植物図鑑』を持ち歩い
ています。一緒に山に行くと大変で、五
〇〇m歩くのに三時間もかかる（笑）。
そういうのが良い生き方なのかな、と思
っています」との言葉で、講演は締めく
くられた。

専門委員会第六五・六六期 事業総括

●販売・出展委員会

当委員会では自然科学書の普及を目的とした大きな活動として、「東京国際ブックフェア」におけるブース出展、「自然科学書フェア」の開催があげられます。さらに海外での普及のため、北京およびフランクフルトで開催される国際ブックフェアへ出展しています。

◎東京国際ブックフェアでは、当協会は三・五ブースを確保して展開しています。二〇一五年は、七月一日（水）～七月四日（土）に開催され、会員六〇社に加え会員外から二社の参加があり、二四四一冊を出品し、前年を上回る売り上げを得ました。翌二〇一六年は、フェアが読者謝恩と銘打って開催時期も変更され、九月二三日（金）～二五日（日）の三日間開催となりました。会員社五八社、会員外二社の参加で二八二四冊と出品数も増やして臨みました。開催期間が短くなったものの来場者数は前年よりも増え、売上も過去最高となりました。

◎自然科学書フェアは、二〇一五年六月三日（水）～八月二日（日）の会期で、京都駅前の大垣書店で開催しました。国際土壌年であることを受け会員外の農業書出版社にも出品をお願いして「土壌」のコーナーを設けました。二〇一六年は六月一日（水）～六月三〇日（木）の会期で、三省堂書店池袋本店で開催しました。自然科学書フェアの東京での初めて

の開催となり、常設イベントスペースを一月間貸切つての展開は、同書店にとっても池袋本店がランドオープンして初めての試みでした。

◎海外のブックフェアへの展開は、北京国際図書展示会へのブース出展とフランクフルトブックフェアへの日本共同ブース展示を行いました。北京は二〇一五年八月二六日～三〇日で二社から二三三点、二〇一六年八月二四日～二八日で十七社から一八四点の出品をしました。フランクフルトは、二〇一五年十月十四日～十八日で十七社から四四点、二〇一六年十月十九日～二三日で十七社から四三点を展示しました。

（販売・出展委員長 池田和博）

●広報委員会

平素は広報委員会の事業にご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。広報委員会では、以下の三つを主な事業として行っております。

一つ目は、年四回の会報の発行です。当協会の活動報告はもとより、「自然科学書協会」に期待することなどの記事を各方面の方々からご寄稿いただき、会員各社の皆様に有益な情報を提供し、また外部の方に対しても当協会の活動内容等を伝えていけるものを目指しております。第六五・六六期に発行した会報のバックナンバーは、PDFファイルの形で協会ホームページに掲載しております。

二つ目は講演会の開催です。第六六期は、ノンフィクション作家・評論家として著名な柳田邦男先生を講師にお迎えし、

自然科学書協会創立七〇周年記念講演会「文学としての科学書」を五月一日（土）に日本出版クラブ会館・鳳凰の間にて開催いたしました。本号の4～5頁にノンフィクションライターの松浦晋也氏による報告記事を掲載しておりますので、ご覧いただきたくお願いいたします。講演会の参加者は一八八名でした。

三つ目は協会活動のPRです。PR活動の一つである当協会ホームページについて、第六五期は通常の更新作業を行いました。第六六期は構成などの見直しを行い、会報バックナンバーのページを見やすくしたり、協会紹介ページの全面的な修正、「自然科学書協会五〇年史」（PDFファイル）の掲載、また講演会や自然科学書フェア、サイエンスカフェのそれぞれの開催一覧ページを設けるなど、当協会の活動内容等をより周知しやすいようにいたしました。

なお、会報やホームページなど広報に関するご意見やご要望がありましたら、お気軽に事務局宛にお寄せいただければ幸いです。今後もより一層の広報活動を行ってまいりますので、会員各社・関係各位のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

（広報委員長 吉野和浩）

●著作・出版権委員会

第六五期開始早々には二〇一四年に公布された、電子出版権が認められた改正著作権法に則した自然科学書協会出版契約書ひな型を完成させ、二〇一五年八月二七日に日本出版クラブ会館において会

員社向けに説明会を開催いたしました。

第六六期には文化庁の文化審議会著作権分科会で進められている、学校その他の教育機関における著作物の複製に関する著作権法第三五条の制限事項拡大につながる「教育の情報化の推進に関する検討会議」の内容について委員会内での議論、会員への情報発信を行いました。この「教育の情報化の推進に関する検討会議」では、現行で権利制限事項とされている遠隔地での授業への同時公衆送信に加えて、異時での公衆送信を権利者への補償金付きで権利制限事項とする内容で、二〇一七年秋の臨時国会での法制化に向けて準備されています。また我々権利者は教育現場で著作権法第三五条を超える利用が有料ライセンス付きで行えるシステムの構築を文化庁から要請されております。現在当協会は、権利者団体で構成される「教育利用に関する著作権等管理協議会」に会員として参加し、補償金や有料ライセンスの運用方法の策定に関わっております。また当協会は、日本書籍出版協会主催の「教育利用に関する著作権等管理協議会」参加出版団体で構成される会議に参加し「著作権法第三五条運用ガイドライン」の改訂に協力しております。

（著作・出版権委員長 梅澤俊彦）

●研修委員会

研修委員会は、会員社に対する研修会・勉強会や、一般読者を対象とした「サイエンスカフェ」等の開催を通して、自然科学書出版の発展および自然科学関連知

識の普及・啓蒙に寄与することをめざしております。

第六五・六六期には、サイエンスカフェを五回、研修会を一回開催させていただきます。

まず第六五期には、二〇一五年六月二〇日(土)、大垣書店との共催で「土壌と私たち―土の声を聴け―」(講師・矢内純太・京都府立大学教授)、また七月四日(土)、三省堂書店との共催で「スポーツを脳科学する」(講師・荒巻勇・中央大学教授)、七月二五日(土)、大垣書店との共催で「生まれ変わる動物園」その後(講師・田中正行・京都市動物園研究員)と題したサイエンスカフェを計三回開催いたしました。

第六六期に入りまして、二〇一六年六月一日(土)、三省堂書店との共催で「気候変動リスクと人類の選択―地球温暖化で世界はどう変わるか―」(講師・江守正多・国立環境研究所主任研究員)、六月二五日(土)、同じく三省堂書店との共催で「土砂災害と防災教育―『生きる力』を身につける―」(講師・今村隆正・(株)防災地理調査取締役)と題したサイエンスカフェを計二回開催いたしました。

また、二〇一六年六月二四日(金)には出版学会研修委員会との共催による合同研修会「医書・j p―出版社による新たな配信・販売戦略―」(講師・金原俊・医書ジャーピー株式会社取締役)を開催、四五社・七五名という参加者を得ました。多くの催しを成功させられましたのは、会員社・関係者方々のご支援ご協力のたまものと存じます。今後とも研修委員会

をよろしくお願い申し上げます。

(研修委員長 朝倉誠造)

●総務委員会

第六五期および第六六期の総務委員会活動についてご報告いたします。

総務委員会の担当は、大きく分けて庶務、総務、財務に分けることができます。毎月開催される定例理事会においてはその進行および議事録の取りまとめを行います。また、年二回開催される定例総会(予算・決算)の進行および議事録の取りまとめ、公益目的支出計画実施報告書の策定があります。

特に、当協会是一般社団法人への移行期間であり当初は第六五期に移行完了を目指しましたが、諸事情により当初の予定を一年延長しましたので、この会報が発行される頃には法人移行が完了しているものと思います。

このほか、

・「文部科学大臣表彰科学技術賞」の候補推薦

他団体との共益事業として、

・「全出版人大会」共催

・「出版平和堂功労者顕彰会」共催

・「出版印刷人のつどい」共催

などの窓口としての機能も果たしております。

二年間の活動を振り返ったとき、当協会の七〇周年事業と一般社団法人への移行に関われたことが記憶に残っております。また、第六六期第二回総会でも触れましたが、法人移行に伴う赤字公益事業の実施のための原資は、主に内部留保金

の取り崩しによって行いましたので、法人移行後は財政再建が急務であります。

このため、会員の皆様には総会において会費の値上げをご了解いただいた次第です。予算総会でもお伝えしたように、協会として行すべき実施事業を継続しつつ、財政の健全化にむけ今後ともご理解ご協力賜りますようお願い申し上げます。

(総務委員長 飯塚尚彦)

●税制・再販流通特別委員会

二〇一五年一〇月一日から予定されていた消費税率一〇%への引き上げは一年半繰り下げて二〇一七年四月一日に延期され、参議院選を一月後に控えた二〇一六年六月にはさらに二年半の再延期が表明されたため、現時点では二〇一九年一〇月に設定されている。

二〇一四年四月一日に消費税率が八%に引き上げられ、その年が一九九七年に出版市場がマイナス成長となつて以来最大の落ち込みとなつたことから、次の消費増税が、出版業界にとって更なる売上縮小となる危険性を孕んでいるため、日本書籍出版協会(以下書協)を筆頭に出版界を挙げて引き続き軽減税率適用を求めてきたところである。

この軽減税率適用については、新聞については既に決まっているものの出版物へは継続検討事項となっており、さらに専門書においては今後不可欠になる電子配信については、その取扱いが必ずしも明確になつていない状況で容易な道のりではないが、出版界としてはぜひ実現したい課題である。

また、二〇一四年の八%への税率引き上げ時に、書協その他関連団体と連携して「消費税率変更に伴う経過措置」等への対応をしてきたことで大きな混乱もなく対処できたことから、次の引き上げに際しては(出版物への軽減税率の適用がない場合は)、その経験を生かして来たるべき日に向けて準備をしておかなければならないと考えている。

主な事項としては次の三点である。

(一) 出版物への価格表示について

出版物の本体やカバー、スリッパも含め、総額表示の義務が免除される特別措置の延長適用。

(二) 特定新聞等(雑誌)について

税率変更時に書店店頭でのPOSレジで新旧税率を区分できない事態が予想されることから、税率変更前に発売されたものを含めすべての雑誌を単一消費税で販売することを可能にする措置。

(三) 予約販売に係る書籍等(雑誌定期購読)について

これは他の商品契約への波及など諸般の理由で見送られた課題であるが、予約販売による雑誌等の定期購読について、旧税率の期間に行われたすべての予約販売契約について税率変更前に代金を受領したもののについて旧税率の適用を可能とする経過措置。

(税制・再販流通特別委員会 伊藤富士男)



自然科学書フェア二〇一七

今年の自然科学書フェアは前期と後期の二期にわたり、前期を五月二十七日（土）～六月二日（木）まで、高知県高知市帯屋町にある金高堂書店本店にて、後期を六月二十四日（土）～七月三日（日）まで、高知大学にほど近い大谷公園町にある金高堂書店朝倉ブックセンターにて開催しています。

六月一日には正副理事長はじめ協会役員・委員が本店フェアを訪問し、金高堂書店の亥角社長ら幹部の方々と懇親会を行いました。

今回のフェアは、「自然科学書一〇〇〇点フェア」と題し、理学、工学、農学、医学、家政学について、子どもから大人まで楽しめる本、専門分野けれども比較的読みやすい本や図鑑など、参加会社四〇社から厳選された書籍一二〇〇点を展示販売しました。

また、書

影入りの一〇〇〇点フェア出品目録を作成し、店内配布はもちろん、金高堂書店外商部を通じ、大学などの教育機関や図



亥角社長（右から４人目）と協会役員・委員



書館等に配布いたしました。

金高堂書店本店では、雑誌売り場と書籍売り場を隔てる動線通路にある常設コーナーでフェアを展開し、お客様と自然科学書との偶然の出会いを演出しました。また、大枠のジャンル分けの他、テレビや新聞、ネットで話題となっているキーワードを意識し、「科学の扉・入門書」や「少し不思議なホントの話」「海と魚と健康に関する本」「統計学」「人工知能」などのミニコーナーも設置しました。

金高堂書店朝倉ブックセンターでは、フェアコーナーを「自然科学書ストリート」と称し、各ジャンルに分かれたワゴンや棚を設置し、ジャンルを横断的にみられるようにしました。また、ワゴンや棚、ケーブルリールなどを活用しコンパクトにまとめた展示をし、気軽に本を手にとってみられるような工夫をしました。さらに、



金高堂書店朝倉ブックセンターでのフェアの模様



金高堂書店本店でのフェアの模様

会員社から送付されたカバーを柱や壁に貼り、ペンギンのはく製や大きな貝殻の展示などと合わせて、店内を盛り上げました。

店を訪れたお客様からは、フェアに対するお褒めの言葉や、再び自然科学書フェアを開催してほしい旨のご希望も寄せられているようです。

（販売・出展委員会 御園英伸）

サイエンスカフェ開催される

研修委員会では高知市の金高堂書店との共催により、同書店にて開催された「自然科学書一〇〇〇点フェア」中のイベントとして、サイエンスカフェを開催いたしました。

日時・六月一七日（土）一四時～一五時三〇分

会場・金高堂書店・旧本店特設会場
講師・奈良正和先生（高知大学教授）
演題・「高知の地層から読む地球環境変動と化石生物の暮らし」

講演の冒頭「これは何の化石でしょう」というクイズから始まり、参加者の方に

実際の化石標本に触れていただく

など、講師・奈良先生の工夫をこらしたプレゼンテーションはじつに見事で、皆が時を忘れて見入っていました。

高校生など若い参加者も目立ち、このようなイベントを地方都市でも展開しているという確かな可能性を感じるサイエンスカフェとなりました。

（研修委員会 石黒太郎）



サイエンスカフェの模様